



〒915-0823  
 福井県越前市本町10-2  
 親縁山 大寶寺  
 TEL/FAX (0778) 22-1682

ぶつみょうえ 佛名会のご案内

日ごと寒さが増すこの頃、皆さまにおかれましては、ご健勝のこととお喜び申し上げます。十二月に入り、大寶寺の周辺の木々は紅葉の盛りを過ぎ、落葉の季節を迎えています。十一月二十四日には各地区の代表の方々にお願いして、寺の

紅葉と初雪のコントラスト。湯尾神社にて。11月21日撮影



雪囲いと雪吊りをしていただき、おかげさまで、冬支度が整いました。

さて、今年の佛名会は十三、十四の両日にかけてお勤めいたします。今年、鯖江市長泉寺町の西福寺のご住職金子善雄上人に回向師をお願いしました。また、中居の慈徳院の澤井祐浄上人に法話を頂きます。なお、例年のように水塔婆回向と浄焚会を催しますの、下記を参考に申し込みください。ご先祖のご供養をし、一年を締めくくり、清らかな心で新年を迎えるため、ぜひお参りくださるよう御案内いたします。

大寶寺 佛名会のご案内

○十二月十三日(土)  
 午前十時より 塔婆回向  
 午前十一時 布教  
 午後二時より 塔婆回向  
 午後三時より 布教

○十二月十四日(日)  
 午前十時より 塔婆回向  
 布教  
 浄焚会 (十一時半頃)

回向 鯖江市長泉寺町西福寺  
 金子善雄 上人  
 布教 越前市中居慈徳院  
 澤井祐浄 上人

法然上人八百年大遠忌記念

前進座公演「法然と親鸞」



浄土真宗10派の信徒の方々とともに福井市文化会館にて中村梅之助、嵐圭史の演ずる前進座の公演「法然と親鸞」を鑑賞いただけます。

先日来ご案内致しました「法然と親鸞」の募集につきましてはあらかじめ希望者数を把握の上、多数の場合は抽選をして決定することになりました。観劇をご希望の場合は、電話などで直接寺までお申し込みください。

期 日 平成21年3月26日  
 昼の部 2 p.m. ~ 5 p.m.  
 夜の部 6 p.m. ~ 9 p.m.

会 場 福井市文化会館  
 申込締切 12月20日  
 S席 7,000円 A席 6,000円 B席 5,000円

ぶつみょうえとうば えこう 佛名会塔婆回向のお勧め

佛名会では各家先祖代々また先になくなられた方々の塔婆回向をいたします。回向料は、一霊につき六百円です。別紙申込用紙にご法名をご記入の上、帳場にてお申込みください。

なお、武生地区の檀信徒の皆さまには、例年のように寺からご回向を頂いている霊位の一覧(A5判)をお配りいたします。寺からお申込みを頂きにうかがいますので、変更などご希望の場合にはそのときにお申し出ください。

じょうぼん え た 浄焚会 (お焚きあげ) のご案内



12月14日佛名会の終了後11時半頃に浄焚会をとり行います。古い戒名札やお位牌、お経の本、木魚など一般のゴミとして処分することがためられる物品を、ご供

養をした上でお焚き上げをします。ご希望の方は当日、帳場にお持ちいただくか、当日までに寺にお預けください。ご供養は無料です。



トピックス  
バス駐車場看板設置 11月12日



越前市まちづくりセンターの依頼を受け、大寶寺の境内に観光バス専用駐車場の看板が設置されました。あらかじめ申込みがあり、寺の行事などに差し支えない場合に限り、観光バスの駐車許可を予定で

大寶寺十夜法要 11月14・15日  
法林寺十夜法要 11月18日

大寶寺では14・15日に十夜法要を営みまし  
た。14・15の両日は暖かい秋晴れに恵まれ  
ました。18日の午後七時から法林寺にてお  
十夜が営まれましたが、お十夜荒れのこと  
ば通り、あられ混じりの冷たい雨が降りま  
した。



14日の夜のお勤めのあと、参詣者の皆さまには境内で実った栗の入った小豆粥を召し上がって頂きました。

雪吊り、雪囲い 11月24日

各地区から十三名の参加を得て、恒例の雪吊りと雪囲いをしました。午後から雨が強くなるとの予報があり、午前中で作業を切り上げました。おかげさまで、冬支度が整いました。お手伝い頂いた皆さまご多忙中本当にありがとうございます。



手分けして雪吊りと雪囲いの作業をして頂きました。竹を編んだ雪囲いは、設置が面倒ですが大変風情があります。

ご案内

除夜の鐘 12月31日

大晦日の11時45分頃より、除夜の鐘をつきます。どなたでもついて頂けますのでぜひお越し下さい。

修正会、年頭 元旦、1月2日

無事新年を迎えられたことを感謝し、一年をすこやかに過ごせるよう元旦に大寶寺と法林寺にて修正会を行います。

昨年引き続き各地区の年頭を2日に大寶寺にて行いますので、ぜひご参加下さい。

濁中蓮華

濁った世間に咲く蓮の花の意

四苦について

仏教では生老病死のことを四苦というが、考えてみると意味が曖昧だ。老と病はともかく、生が苦であるというのは分かりにくい。死が苦しいかどうかは、死んでみなければ分からないことで、臨死体験をした人の中には光に包まれたとか、きれいなお花畑を見たとか言う人すらいる。

「苦」は、サンスクリット語では dukka であるが、次のように例えられる。

キーキー音をたてて、ぎこちなく回転する大きなロク口を回す苦痛。あるいは、車輪が片方こわれた荷車に乗って、ガタゴトと揺られる苦痛。 英語版 Wikipedia

「思うようにならず、もどかしさを感じる、不満を抱く」というのが dukka の意味で、一言でそれを表すことばは、日本語にも漢字にも存在しない。そのことが四苦の意味を曖昧にしている。

生まれようとして生まれた人は誰もいない。また、生まれ出る環境を選択することも不可能である。「生」はしよせん、与えられるもので自らの思うようにはならない。また、「老」は、せいぜい遅らせることができるだけで、それを止めることは不可能だ。身体や精神のどこにも異常がなく、まったく「病」のない完全無欠の健康体などありえない。「死」があるのはそれが生命体であることの証明で、死なないものは単なる物質、もしくは機械だ。生老病死は、命にはつきもので、思いどおりにはならないにもかかわらず、それら

を意のままにしたいという願望が、もどかしさや不満、恐怖心、ときには怒りなどの精神的苦痛を生むとお釈迦さまは説く。そこから解放される手段として、四苦をそのまま受け入れること、すなわち「諦める」ことを釈尊は勧める。

だからといって、何でもかんでも諦めるというのがお釈迦さまの教えではない。科学の発達は、生老病死に一定の影響を与えることを可能にした。だから、できることはすればよい。しかしながら、あまりにそのことにとらわれると、かえって不幸をまねく。いすぎた健康志向や、抗加齢、医療行為がその例である。どんなに健康や若さを誇っていても、老いるときには老い、病を得るときには、病を得、やがて死ぬことは避けられないのである。

アメリカの神学者、ニーバーによって書かれた「静穩の祈り」というのがある。

神よ、

変えることのできるものについて、

それを変える勇気をわれらに与えたまえ。

変えることのできないものについては、

それを受けいれる冷静さを与えたまえ。

そして、

変えることのできるものと、変えることのできないものとを、識別する知恵を与えたまえ。

たまえ。 大木英夫訳(神学者)

心の真実は洋の東西を問わず人々を同じ所に導く、ということではなからうか。

合掌

「諦」という文字は、「真相をはつきりさせて、決断する」という意味で、仏教用語としては真理、悟りという意味がある。